

三管合流部の把握が容易であり、胆管損傷を予防し、安全、円滑に腹腔鏡下胆嚢摘出術を遂行するためには有用な検査法である。

36. ヘリカル CT を用いた胆道の立体画像構成一とくに三管合流部の三次元画像について—

(獨協医科大学第二外科, *福田記念病院)

門馬公経・小原靖尋・高橋秀光・
大沢 歩・門脇 淳・小暮洋暉・
青山良英*・福田武隼*

1993年5月より約7カ月間に福田記念病院において経験した胆石症症例38例に対し、DICを併用したヘリカルCTを行い、得られたボリュームデータから三次元画像構成を試みた。3D画像で、胆道系は肝内胆管から肝外胆管まで明瞭に描出され、特に三管合流部は、DICで胆嚢造影陰性例においても全例に胆嚢管起始部が描出された。この結果より三管合流部の合流形式を検討したところ、胆嚢管は総胆管の右側後方から分岐するものが15例(39.4%)と最も多く、次いで右側12例(31.6%)、さらに前方6例(15.8%)、左前方3例(7.9%)、右前方2例(5.3%)であった。この検査法は、胆石症の術前胆道検査法として有用である。

37. 胆道疾患の画像診断における computed radiography (CR) の有用性について

(東京女子医大青山病院消化器内科, 同成人医学センター)

石黒久貴・安達由美子・山形美帆子・
安部康二・秋本真寿美・橋本 洋・
新見晶子・栗原 毅・前田 淳・
重本六男・山下克子・横山 泉

(同青山病院放射線科)

鈴木 隆・吉田慈俊・山田隆之

今回我々は、胆道疾患における computed radiography (CR) の有用性について検討したので報告する。当院で使用しているCRは富士メディカル社製FCR7000と東芝メディカル社製TDISである。対象症例は、胆嚢隆起性病変5例、胆嚢アデノミオマトーシス2例、総胆管結石合併胆嚢結石1例、胆嚢結石2例である。

〔結果〕①胆嚢アデノミオマトーシスでは白黒反転強調処理が有用であった。②胆嚢隆起性病変の表面性状の描出には階調処理が優れていた。③今後は、エネルギーサブトラクション法や、ステレオ撮影を行い診断能の向上に努めたい。

38. 経左上腕動脈的腹部血管造影法

(日大医学部放射線科)

武藤晴臣・島田裕司

血管造影検査後にベッド上の安静から解放させ、被検者の負担をできるだけ減少させることを目的として、左上腕動脈経由の腹部血管造影をルチン化した。1992年度の秋から開始し、1993年1月からは原則として駿河台日大病院放射線科依頼の全症例を対象とした。症例数は165例である。少なくとも肝動脈造影に関しては、鼠径部からの場合と比較し、遜色なく施行することができた。

今回は、合併症に関する検討を中心に報告した。合併症として最も危惧すべきものは、上腕動脈の血栓形成による阻血であるが、一時的に阻血状態になったものは8例に見られたが、7例は検査後早期に回復していた。1例は検査後早期に他院に移り、経過追求ができなかった。他に大きな合併症は無く、本手技の臨床的な意義は大であると考えられた。

39. 福田記念病院における腹腔鏡下手術の経験

(獨協医科大学第二外科)

高橋秀光・小原靖尋・大沢 歩・
門馬公経・小暮洋暉

(福田記念病院) 福田武隼・橋本俊久

現在、腹腔鏡下手術は胆嚢胆石症症例にとどまらず、その適応が急速に広がってきた。当院でも胆石症を中心に腹腔鏡下手術を施行しているので報告した。対象は1992年5月から福田記念病院で経験した74症例で、その内訳は胆石症 64例、その他、胆嚢ポリープ 2例、胆嚢癌 2例、癒着性イレウス 4例、鼠径ヘルニア 2例であった。腹腔鏡下手術を施行中に開腹に移行した症例は全体で9例であった。術中合併症は10例経験した。術後合併症は、皮下気腫5例、肝機能障害、胆管炎、腹腔鏡膿瘍、創感染が各1例でいずれも保存的治療で治癒した。

40. 化学療法が著効を呈した胆管癌の1例

(植竹病院)

中上哲雄・植竹光一・井上 敦

(東京女子医大消化器外科)

中村光司・吉川達也

症例は71歳男性、全身倦怠感、体重減少を主訴に来院。超音波検査施行にて肝内胆管の著明な拡張が見られ、即日入院としPTCD施行したが諸検査にて手術不可能な広範囲胆管癌と診断された。そのため化学療法をシスプラチン70mg/m²、ロイコボリン20mg/m²×4